Japanese Association for Religious Studies



解を深め、グローバル社会における日本宗教の語り方を考えていきます。（後略）」

以上のような講義を担当する中で、次の点に配慮しており、これらの点がこの講義の特徴にもなっている。

一、宗教は「怪しい」「危ない」「理解不能」といった先入観をできるだけ取り除く（アニメ・マンガの利用）。

二、身近な神社仏閣を訪ねてみたくなるようなインセンティブを与える。

三、世界史的・アジア史的な文脈の中で、日本宗教の特徴を理解する。特に、一神教との比較を行うことによって、諸宗教に対する単純な優劣意識（「一神教」対「多神教」など）を持たないようにすると同時に、宗教の普遍性やグローバルな課題にも目を向ける。

四、国外で活動している日本宗教（仏教や新宗教）の実情や課題を紹介し、国際社会における日本宗教の役割を考える。

五、海外で日本宗教を英語で説明できるように、講義におけるキーワードは日英を並記する。

六、日本宗教を教えや儀礼の側面からのみとらえるのではなく、文化や政治力学（宗教と国家、宗教と戦争、政教分離等）との関係の中で理解する。

七、留学生に対しては、彼ら・彼女らの宗教的背景を考慮し、また、それとの比較を通じて、日本宗教や日本人の宗教観について説明する。

小原克博 On-Line（http://www.kohara.ac）Education の項目に授業資料あり。

## 「日本宗教史」の教え方
### ――特に中国宗教の論じ方と関連して――

菊地章太

宗教がどれほど広範な文化事象とつながっているか。教養教育において宗教にかかわる講義を準備するとき、ひとつの課題としてこのことを考えてみたいと思う。

宗教は高度な思想と体系的な教義を備えているが、同時に卑俗で雑駁な面も持ちあわせている。庶民の日常に密着した部分は、広くて深いものがあるにちがいない。中国では儒教も道教も、ともに人々の宗教的心性や宗教感情のなかに浸透してきた。道教は教団の宗教としては日本に伝わってないが、それにかかわるもろもろの習俗は日本に伝わって、私たちの生活に根づいている。その一例として庚申信仰を取りあげたい。

私たちの体にはいろいろな虫がいる。ふさぎの虫、昼寝の虫、虫のいどころが悪い虫、虫が知らせる虫、等々。疳の虫もいる。赤ちゃんの夜泣きの原因とされる。どれも実体があるわけではない。いるはずのない虫なのに、心も体も支配されている。その典型が三尸の虫である。

四世紀に書かれた『抱朴子』によれば、体のなかいる三尸の虫は、人が早死にするのを望むという。庚申の日に、人の寿命をつかさどる司命の神にその人の悪事を告げにいく。長生きがしたければ、その日に眠ってはいけない。三尸が体から出られないよう見張りをする。これを守庚申と呼んだ。この習俗はや



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



がて日本にも伝わった。古くは平安時代の貴族や僧侶の日記・詩文などに語られている。

三尸が寿命を縮めるという観念、および庚申の日に夜を徹する習俗は道教に由来する。一方で、これをすべて日本固有の伝統と捉える見方も民俗学には根強くある。日本では仏教的な習俗に変容しており、青面金剛が祀られた。この病魔退散の本尊を刻んだ庚申塔は、ほぼ全国に見られる。庚申すなわち「かのえさる」にちなんで、足もとに「見ざる聞かざる言わざる」の三猿を従える。神道に傾斜していくと猿田彦命が祀られる。

ふた月に一度めぐってくる庚申の晩、村の男衆と女衆がそれぞれ別の家に集まる。一晩中おしゃべりをして過ごす。これを月待ちと呼んだ。そこで悠長に語り、語りを聞く。そうした機会が、ついこのあいだまで私たちの身近にあった。

宗教が広まっていくとき、どこまで在来の民俗に浸透していくか、あるいは逆に、民俗事象のなかに呑み込まれて変質を余儀なくされるか。その具体的な経過を観察してみれば、むしろ周囲の文化と混淆していく方が、よほど宗教の現実の姿に近いように思う。シンクレティズムこそ宗教の現実のありようだとは言えないだろうか。

日本の庚申信仰は、道教と仏教と民間信仰が溶けあって変容をかさねてきた。民俗学者がこれを日本固有のものと見なしたのもそれなりの理由があった。ある場面では宗教とさえ認識されなかったのである。しかし、その大もとをたどってみれば、民俗事象の根底に宗教の長い歴史があり、それはアジアにまでつながっていた。大学の教養教育のなかで、そうした視野から宗教の広がりの大きさを伝えることができればと思う。

## 「日本宗教史」の教え方
### ――特に神道の論じ方と関連して――

鎌田東二

発表者は二十五年近く「宗教学」を担当してきた。学生に望むことは、「とらわれを捨て、自分の眼で物事をとらえ、自分の足でたずね歩き、自分の頭で考える」ことで、そのための素材となる知識と理論と考え方を提供することを心がけている。

講義概要は、【宗教は人を救うか、それとも破壊するか？かつて、近代化が進むと宗教は衰退するか消滅するといわれていた。しかし実際には、宗教は近代化の中でも生きつづけ、さらにそれを超えて生きつづけている。新新宗教にひかれ、入信する若者も少なくない。いったい、このような「宗教」とは何だろうか。本講義では、宗教の発生と展開と社会とのかかわりを、広く文明論的かつ比較宗教学的な観点と方法によってとらえ、考察を加えてゆく。宗教はいかにして生まれ、どのような社会の中で発達してきたのか。またどのように社会を変革し、社会に規制されてきたのか。その相関関係を諸宗教の歴史的変遷と構造的特質を比較検討する中で明らかにしてみたい。これまでの宗教の功罪と未来の可能性についても考えてみたい。】（「宗教学Ⅰ」：春学期・前期シラバス）、【本講義は春学期授業「宗教学Ⅰ」を受けて、その観点と方法に基づいて「日本の宗教」を考察する。特に、比較文明論的かつ比較宗教学的な観点



NII-Electronic Library Service